

古事記に学ぶ その 25
仁徳天皇の御世の終わり

<1> 太后と黒日売(くろひめ)

この天皇の太后であった石之日売命(いわのひめのみこと)は大変嫉妬深い人だった。

ある時、天皇は吉備の海部(あま)の直(あたえ)の娘である●黒日売(くろひめ)が姿形が麗しいと聞いて、宮殿に呼び入れた。しかし黒日売は、太后に妬まれるのが怖くなって、宮殿を抜け出して故郷の吉備に帰ってしまった。天皇は高殿に上って黒日売が船出する海を眺めて、歌を歌って悲しんだ。太后の石之日売命は、天皇のこの歌を聞いて大層憤り、難波の大浦に人を差し向けて、黒日売を船から引きずり降ろして、吉備まで陸路を歩いて帰らせた。

一方の天皇は、黒日売のことが忘れられず、「淡路島見物の旅に出る」と言い残して旅に出た。

淡路島に着くと、次は吉備の國へ向かった。黒日売は天皇を食事でもてなした。

天皇が國へ帰る日、黒日売は、それを悲しんで歌を歌った。

<2> 太后と八田若郎女(やたのわきいらつめ)

前項の事件ののち、太后の石之日売命(いわのひめのみこと)が、盛大な宴を開く準備を始めた。

木の國(のちの紀ノ國)へ、禊に使う御綱柏(みつながしわ)の葉を採りに行った。

その留守を狙って、天皇は異母妹の八田若郎女(やたのわきいらつめ)を引き入れて、妻にした。

*閑話休題

八田若郎女(やたのわきいらつめ)は、応神天皇と宮主矢河枝比売の間で生まれた第二子。

大雀命(おおさざきのみこと:仁徳天皇)は、応神天皇と中日売(なかひめ)の間で生まれた第二子。この二人は腹違いの兄妹という関係。

太后の船は、御綱柏(みつながしわ)の葉をたっぷりと積んで難波に戻ってきた。

吉備の國の児島出身のある人足の男が國へ帰ろうとして、船着き場に現れた。そこへ、雑仕女(ぞうしおんな)を乗せた船が着岸した。男は雑仕女の一人に、噂話を聴かせた。

「天皇様は、太后が留守の間に八田若郎女(やたのわきいらつめ)を連れ込んで婚礼をしてしまったそう。太后様は呑気に出かけ歩いているけど、何も知らないみたいだ」

雑仕女は、太后が乗っている船まで駆けつけて、太后にこの話を報告した。

太后は激昂して、船に積んであった御綱柏の葉を、残らず海に投げ捨ててしまった。それでも怒りは治まらず、宮殿に戻らずそのまま海から堀江へ、堀江から川へと山城の國まで遡って行き、奈良を過ぎ大和を過ぎて、故郷である葛城の高宮へ。歌いながら少しずつ心を鎮めつつ旅を続けた。そして再び山城の國へ戻り、筒木にいた韓人(からびと)の●奴理能美(ぬりのみ)の家にしばらく滞在した。

天皇は、太后が山城から大和へ行ったことを聞いて、難波の宮殿に戻らせようとして、側近の●鳥山(とりやま)という舎人を通じて歌を送り届けた、さらに、丸邇(わに)の臣●ロ子(くちこ)を使いに出して歌を届けさせた。

ロ子の臣が御殿の周辺で天皇の歌を歌って歩いていると、激しい雨が降ってきた。ロ子は山藍で染めた青摺(あおずり)の衣を着て紅色の紐を締めていたが、雨に濡れて衣の色が紅色に染まった。

太后の側近として仕えていたロ子の妹の●ロ日売(くちひめ)が、兄の哀れな姿を見て歌にした。

大后がこれを聞いて、口日売が歌う歌の訳を尋ねたところ、「あれは私の兄の口子の臣です……」
天皇からの使いが何度か大后を訪ねたが、大后は御殿に戻るとは言わなかった。そこで、口子の臣・口日売・奴理能美は三人で相談して、難波の御殿にいる天皇にこんな話を聞かせることにした。
「奴理能美が飼っている虫は、ある時は這う虫になり、ある時な殻に閉じこもり、ある時は空を飛びま
す。大后様はこの不思議な虫を見たいとのことで私の家までお出でくださいました。」
すると、天皇は「私もそれを見たい」と言って、河を遡って山城の筒木まで出向き、奴理能美の家の前
で歌を歌った。
天皇と大后が歌った六つの歌は、魂を鎮める「志都歌(しずうた)」である。

天皇の八田若郎女(やたのわきいらつめ)への思いは失せることはなく、再び歌を送り届けたが、八田
若郎女からの返歌は、期待に反するものだった。
「八田の一本菅は 独り居りとも 大君し よしと聞こさば 独り居りとも」
そして、八田若郎女の思い出を残すものとして「八田部(やたべ)」を定めた。

<3> 女鳥王(めとりのみこ)を巡る諍い

天皇は、女鳥王(めとりのみこ)を妻にしたいと考えて、弟の速総別王(はやぶさわけのみこ)に仲介を
頼んだ。女鳥王は前項に出てきた八田若郎女の妹、つまり父である応神天皇と宮主矢河枝比売の間
にできた三人の御子の一人。

また、仲介を頼んだ速総別王は、応神天皇と糸井比売の間に生まれた御子で、ここに登場する人物
は、腹違いの兄弟姉妹ばかりである。

速総別王は、天皇の意向を女鳥王に伝えた。女鳥王の反応はこうだった。

「大后様が嫉妬深くて、姉の八田若郎女が逃げ出したほどなので、私はいやです」と答えたついでに、
「天皇様よりも、あなたの方がいい……」と言って、速総別王と一夜を共にした。

結果として速総別王は、天皇から託された仲介の役割を無視することになった。

天皇は女鳥王の気持ちを直接確認しようと思って御殿に出向いたが、結果として女鳥王は速総別王
を選んだことが分かった。天皇の軍隊は、速総別王と女鳥王を追跡した。二人は倉梯山(くらはしや
ま)に逃げ、のちに宇陀の曾爾(そに)で追いつかれて、殺された。

*倉梯山:大和桜井の倉橋山(現在の音羽山 851.4m)と考えられている。山を越えて東へ下れば
宇陀の里である。

*宇陀の曾爾:奈良県の東端で三重県との県境にあり、現在は奈良県宇陀郡曾爾村と言う。

この追撃の際、天皇の軍の将軍を務めたのは山部(やまべ)の●大楯(おおたて)の連。女鳥王が腕
に着けていた玉釧(たまくしろ:腕輪)を亡骸から抜き取って、自分の妻への土産とした。

のちに宮殿で宴が催されることになった時、大楯(おおたて)の連は妻を伴って宴に加わった。妻は夫
の戦利品の玉釧を身につけて、嬉々として同伴したのだが、大后の目に触れることになった。

大后は、「二人を殺すことは命じたが、かような酷いことをする者は許し難い」として、二人を死刑に処
した。

<4> 雁の卵・枯野(からの)の歌 そして 仁徳天皇の他界

○雁の卵:ある日、天皇は新嘗祭の酒宴を開こうと思って日女島(ひめじま)に出かけて行った。

その時たまたま、その島で雁が卵を産んだ。長老の建内宿禰命(たけしうちのすくねのみこと)を呼ん
で、歌で問いかけた。「山また山の大和の國で、雁が卵を産むことなどあるのだろうか」

建内宿禰命は、「未だ耳にしたことがない」と歌で答えたあと、琴を弾いて歌を続けた。

「天皇の御世が果てしなく続くことを祝って、めでたきことの印として、雁が卵を産んだのでしょう」

これは、めでたいことを寿ぐ本岐歌（ほきうた）の片歌（かたうた）である。

○枯野（からの）の歌：免寸河（とのきがわ）の西方に背の高い樹が生えていた。朝日があたるとその影が淡路島に至り、夕日があたれば影は高安山（たかやすのやま：のちの信貴山）を越えるほどだった。この樹を伐って船を作ったところ、非常な速さで進む船になった。船の名を「枯野（からの）」とした。この船を使って毎朝毎晩、淡路島の冷たい湧水を天皇の御料の水として差し上げた。

やがて、この船が壊れてしまい役に立たなくなったので、塩焼きの薪にして燃やした。そして、焼き残った木材を使って琴を作ったら、七つの里に届くほどの音色を発した。

ことの次第は、歌になった。これは志都歌（しずうた）の歌い返しである。

*閑話休題

免寸河（とのきがわ）：大阪府高石市富木の「富木川（下流は芦田川）」と比定されている。

淡路島と信貴山：淡路島の洲本と信貴山を直線で結ぶと、高石市富木は線上にあるが、中間点ではない。また、高石市富木に巨大な樹木があったとしても、その影が信貴山に及ぶとは考えにくいのでは……。

本岐歌（ほきうた）：めでたいことを祝う「寿ぎの歌（ことほぎのうた）」

志都歌（しずうた）：調子を下げて、静かに歌う歌。「鎮める歌」。

仁徳天皇は83歳で他界した。陵は毛受（もず）の耳原にある。

陵の北端の最寄り駅は阪和線・南海高野線の三国ヶ丘駅、南端の最寄り駅は阪和線の百舌鳥駅。

駅間距離ほどの長さになる、全長 486mの大きな前方後円墳である。

大江之伊邪本和気命（おおえのいざほわけのみこと）が、17代天皇（履中天皇）になった。

以上

*添付資料：仁徳天皇を中心とした系図（次葉）

仁徳天皇を中心とした系図

